

図 書 紹 介

C. A. Fisher: *A Social, Economic and Political Geography, South-east Asia*. Methuen, London, 1964. xix+831p.

シェフィールド大学フィッシャー教授がついに大著「東南アジアの社会・経済・政治地理」を刊行された。たまたま、クアラルンプールの書店で、かねがね出版の噂をきいていた本書の実物を手にして、とうとう出たかとの感を新たにしたのであった。

序文の冒頭にいわく、「ひとつの題目で40万語あまりを書きおえたとき、できればこれ以上書きたくないとの気持ちに抗しきれないだろう」と。まことに気負った書き出しだ。また第2次世界戦争直前からこの仕事をはじめ、3年半以上にわたる現地での抑留生活、そのあとひきつづき東南アジアの各地を調査したという20年以上にわたる長い経験。そしてそれをもとし、しかも40ページに近い付録の文献目録からも明らかなように、膨大な文献渉猟をともとしての業績。フィッシャー教授が当然にこの出版に気負っておられるし、またわたくしもこれを手にして感動せざるをえないのだ。

もちろん、わたくしは900ページに近い本書を読みおえていない。しかし、East および Spate 両教授編集の *The Changing Map of Asia* (1st ed. 1950, 4th ed. 1961) 所収のフィッシャー教授の長論文 "South-east Asia" (これは本書の第1部の骨子となっている) を東南アジア地理として最もすぐれた文献のひとつとして推すわたくしとしては、本書がおそらく東南アジア地理として最高水準にあるものとして推すことに躊躇しない。

本書はつぎのような構成をとる。第1部は統一体としての東南アジアであり、総論にあたる。東南アジアの性格、自然環境、住民等のあとをうけて、120ページにわたって歴史的過程が明らかにされている。第2部は赤道島嶼部であって、インドネシアにあてられ、インドネシアの自然条件、文化的歴史的基礎、第1次第2次世界戦争間の蘭領東インドの経済・社会地理、新インドネシアの経済的諸問題と政治的諸問題、西イ

リアンの諸問題が述べられている。第3部は熱帯大陸部であり、その自然的基礎、ビルマ、タイ、インドシナの章に分けられる。第4部は赤道大陸部であって、4章がマラヤと英領ボルネオにあてられる。第5部は熱帯島嶼部でフィリピン。第6部はエピローグとして、東南アジアと世界との関係が論ぜられる。

とにかく、大冊である。わたくしは、ただ1章だけあたえられているタイについての部分を丹念に読んだが、わたくしの知るかぎり、ひとつの誤謬も見出されなかった。もちん、地理学者が経済・政治・社会問題を論ずるときの弱さ——それは地理学者の宿命であろう——がなきにしもあらずだが、よくぞこれだけまとめあげたものだ、心から敬意を表せざるをえない。これがわたくしの一言にしてまとめうる感想だ。

(本岡 武)

Ronald McKie: *Malaysia in Focus*. Angus and Robertson, Sydney, 1963. xiii+236p.

去る1月27日づけの *Life International* 誌のアジア問題特集号は、パキスタンから日本に至るアジア諸国をカバーしている。その論旨は Time-Life minded と批難されるくらいはあるものの、きれいな写真で助けられて、アジア諸国の現実の問題点を、おもしろく解説している。

このアジア問題特集号のうち、マレーシアに関する解説は、ここに紹介する本書の抜萃でもってあてられている。

Life 誌が本書をそれほど高く評価していることから推察されるように、なかなか明快に、また興味深く、マレーシアの最近の姿をとらえている。著者のロナルド・マッキー氏は、オーストラリアのジャーナリスト。旅行記というよりも、訪問旅行のすぐれた印象記をおもしろく書くことで知られている。この本も、その意味では成功している。

とりわけ、オーストラリアが、東南アジアにたいして、いかに強い関心をもっているか、そのオーストラリアと東南アジアの結びつきが本書に強くあらわれて

いる。また、著者はマラヤ・シンガポール・サバ・サラワクからなる大マレーシア連邦が結成される過程において旅行し、昨年8月の結成後に本書を出版したわけである。この時期に書かれただけに、なかなか重要な点がつかまれている。オーストラリアがこの大マレーシア連邦の結成に、きわめて好意的なことが、そのふしぶしでうかがわれる。

内容は、シンガポール・クアラルンプール・マレーシアの3部にわかれ、追記としてブルネイがある。旅行記として、マレーシアの風物の敘述もたくみであり、human behaviorの描写にもすぐれてはいるが、とくに興味深いのは、政治的・文化的エリートとの面会記である。シンガポール首相リー・クアン・ユー、政治家のデヴィッド・マーシャル、共産党指導者のリム・チン・シオン、さらにクアラルンプールではマレーシア首相トク・アブドゥール・ラーマン、マラヤ大学経済学教授ウンク・アブドゥール・アジズ、作家ハン・スウィンをはじめ、多くのエリートに面接する。

もっとも、これら面会記を読むと、どうも旅行者の印象であり、かなり主観的・一面的だと思われるふしがないわけではない。たとえば、わたくしが知っているアジズ教授と、ここにあらわれてくるアジズ教授とは、だいぶんちがっている。はじめて会った外国人の思想や行動をとにかくいうのは、いかにむずかしいことか。

しかし、それが主観的・一面的であろうと、この人種構造の複雑な、そして国家としてのunityを実現することの困難なこの国の現状を、きわめてヴィヴィッドに描いたものとして、本書はまことに興味深い。今日のマレーシアについてのすぐれた紀行記だと思う。(本岡 武)

Louis J. Walinsky: *The Planning and Execution of Economic Development*. McGraw-Hill, New York, 1963. xiii + 248p.

著者ワリンスキーは、1950年代の約10年間、Robert R. Nathan Associates, Inc. の一員として、ビルマの経済計画の調査と設定とに献身した。かれの体験をとおしてのこの国の経済発展の経過は、かれの大著 *Economic Development in Burma*. 1951~60. に詳しく描かれている(本誌第1号書評参照)。

このビルマにおける長期にわたった経験、さらに加えて韓国・イラン・アフガニスタン・エルサルバドルおよびボリビアにおける短期間の経験をもととして、低開発国において経済発展がいかに計画され、いかに遂行されるべきか、それを non-technical な、また operational な方法で明らかにしようとしたのが本書である。だから、これ、*Economic Development in Burma* の副産物であり、続論であるといえよう。

本書は、第1部の Planning、第2部の Execution および第3部の Some Practical Approach とからなる。付録として、先進国と後進国との比較図表、低開発国の若干の経済指標、低開発国援助機関の表、アメリカおよびその他の諸国の低開発国援助概要、世界銀行借款概要、中ソの経済援助概要、および計画評価論があり、最後に経済計画に関する文献があげられている。

もともと本書は、低開発国における経済計画の立案者のために書かれたものであり、低開発国の経済開発理論ではない。どこまでも、実際に具体的に経済計画の設定と遂行に役立たしめようとするものであり、その意味で、きわめて、わかりやすいように努力が払われている。

とくに本書の価値としては、このワリンスキー氏の長い実際の経験がにじみでている点があげられる。しかも、かれが強調してやまないのはつぎの点にある。経済発展についての方式は決してひとつでない。それぞれの国のもつ条件や目的によって異なる。しかし、その成否は採用される目標・計画・プログラムおよび政策の現実性と継続性に、資源が利用され、計画が運営される効果性に、さらに事業の現実の困難性の認識とそれにもとづいての事業の遂行の決意とにかかると。この決意は外国から与えられるものでなく、どこまでもその国自身がくださなければならない。

わたくしは、この強調点はまさしくかれの多年の経験の結論であるとの感銘をうける。著者は、低開発国の政策立案者が、この決意のもとに、この書物を読んでほしいと切望しているのだ。

本書が詳しく述べている経済計画の設定と遂行については、原則的にわたくしには異論がない。だが、低開発国の経済計画立案ならびに遂行にあたるトップ・レベルのものが、いかにして現実的・継続的に決意を